

第一節 城郭とはなにか

中世は大築城時代

「土の城」の時代

私たちが「城郭」といった時に、まず頭に浮かぶのは姫路城（兵庫県）や彦根城（彦根市）であり、白亜の天守閣、苔むす石垣、白鳥の泳ぐ水堀といった姿ではないだろうか。

しかし、こうした城は、織田信長による安土築城以後に発展する近世城郭であり、特に慶長五（一六〇〇）年の関ヶ原合戦以後に築かれた城の姿である。



写5 水堀に白壁を映す特別史跡の彦根城跡（彦根市）

もちろん、甲賀にも天正十三（一五八五）年に築かれた水口岡山城（水口町水口）という典型的な織豊系城郭や、「碧水城」の名で親しまれる水口城（水口町水口）といった近世城郭も築かれている。ところが、市内に残る城

跡の大半は戦国時代に築かれた城である。その構造や形態は天守閣や石垣などを備えない「土の城」であり、普通にイメージする城郭とは全く異なるものである。

城郭とは軍事的防御施設であり、天然の要害、つまり急峻な山を利用したり、河川を利用することによって、敵からの攻撃を防御する目的で築かれた。その起源については弥生時代の高地性集落や、環濠集落に求められるが、一般的には武士の出現とともに築かれたものを指す。



写6 「土の城」にふさわしい深い堀切（黒川氏城跡）

日本列島には、十四世紀から十七世紀に至る三〇〇年の間に、約三〜四万にも上る城館が構築された。これほどまでの分布数は世界史的に見ても他に例はなく、まさに日本の中世は「大築城時代」であった。中でも爆発的に城郭の築かれる時代が二度ある。一つは十四世紀の南北朝の内乱期と、今一つは十五世紀中頃から十六世紀後半の戦国時代である。

山城の登場

南北朝時代の城郭は、西国の場合、多くは高く急峻な山上に構えられる。ところが、実際にこうした山城に登っても、明確な遺構が残っていないことが多い。それは、当時の山城が急峻な山そのものを防御施設としていたからにほかならない。鎌倉幕府の正規軍は騎兵であり、その騎兵に対処するためには、馬では登れず、また騎兵用の鎧では歩行も困難な山頂部に城郭を求めたわけである。

南北朝時代の史料に「閉籠」という言葉がしばしば登場する。当時の山城は、人工的な防御施設はまだ未熟で、急峻な山に立て籠もる行為そのものが城郭であった。楠木正成が立て籠った千早・赤坂城（大阪府）の遺構



写7 木津川を隔てて笠置山（京都府）をのぞむ

は、戦国時代に改修されたものと考えられているが、それでも小さい。よくこの程度の規模の城郭で鎌倉幕府軍数万の軍勢と戦えたものと驚かされるが、騎兵を寄せ付けないその山深さこそが最大の防御施設だったのであろう。

南北朝時代の山城の特徴として、今一つ山岳寺院を利用

して城郭が構えられたことをあげることができる。例えば笠置寺（京都府）や船上山（鳥取県）に後醍醐天皇が籠ったり、靈山寺（福島県）に陸奥国府が置かれている。いずれも急峻な山上に構えられた山岳寺院を利用して、建物や坊院の存在、さらには反幕府勢力としての宗教勢力の存在などが、寺院を城塞化させたのである。

南北朝の内乱が治まり、室町時代になると、守護は將軍の屋敷である京都の室町御所を模して、各国で「守護所」と呼ばれる一町（約一〇〇メートル）四方の屋敷を構えた。周防国の大内氏館（山口県）や、豊後国の大友氏館（大分県）などでは、発掘調査の結果、室町御所と同様に守護所内に庭園を設けていたことが明らかとなっている。

一方、土豪と呼ばれる在地の小領主たちは、支配する村落の中心部や周縁部に、半町（約五〇メートル）四方規模の屋敷を構えた。屋敷の周囲には土塁や水堀がめぐらされており、「館」「居館」と呼ばれていた。

ところが、十五世紀半ばに京都で勃発した「応仁・文明の乱」では、こうした屋敷では対処することができず、屋敷背後の丘陵や山頂に山城を構えるようになる。南北朝時代の山城が極めて臨時的な施設であったことに対して、戦国時代の山城は恒常的な防御施設となる。山城時代の到来である。